

二〇二三年度

群馬県立女子大学 文学部 美学美術史学科

推薦入試問題

小論文

試験時間は十時～十二時の120分です。中途退室は認めません。

途中で気分の悪くなった場合は、黙って手を挙げて下さい。

問題用紙は、この表紙を含めて十二枚で、最後の二枚は下書き用の白紙です。解答用紙は二枚あります。それぞれが配られたら、指示に従って

解答用紙の各々の所定の欄に受験番号と氏名を記入して下さい。

試験開始の合図があるまで問題用紙の表紙をめくって問題を見てはいけません。

解答用紙の所定の欄に氏名、受験番号を記入し終えたら、静かに試験の開始を待って下さい。

問題

次の文を読んで設問に答えなさい。

収集されたアイヌ文化

現在、見ることができるアイヌ文化の最も伝統的なものは、博物館等の展示資料であろう。当然、これらの「資料」はアイヌの人々の暮らしの中から収集されたものである。収集資料はその目的から大きく二つに分けることができる。一つはアイヌの人々によって収集されたもの、もう一つはアイヌ以外の人々によって収集されたものである。

アイヌの人々によって守られてきた代表的な資料展示として平取町二風谷の萱野茂二風谷アイヌ資料館がある。萱野茂が館長を務めた展示施設で、萱野個人のコレクションとされるアイヌ民族関係の収蔵品のほか、世界各地の少数民族の生活資料も集められている。屋外にはチセ（アイヌ語で家）が復元され、館内にはアイヌの民具約六〇〇点が展示される。これらは失われる前に集めなければならないという萱野の意識から蒐集されたものであると萱野れい子は述べる。旭川の川村カ子トアイヌ記念館はアイヌ文化の保護と伝承を目的とする資料館で、川村カ子トの父の川村イタキシロマにより一九一六（大正五）年に開館した。私設の資料館として現在まで運営されてきたのは、自らの土地や文化を奪われる中で自衛手段だったと思われる。また、幕別町の蝦夷文化考古館もまた無数のモノが集められた空間である。蒐集者・吉田菊太郎は「先祖の遺した文化財を蒐集して一堂に収め永く正しく保存することが先祖に対する「はなせ餞」であると述べ、一九五九（昭和三四）年に考古館を設立した。

これらの展示施設の特徴は、収集によって自文化の形を守ろうとする意識が前提にあり、展示品は体系化されにくい傾向があるが、そのことによって集積したモノ一つ一つの存在感やリアリティが伝わりやすい点にある。

これに対して、アイヌの人々と接触した和人や西洋人、特に研究者や探検家たちも、彼らの生活用品を収集してきた。収集されたモノは、のちに博物館や資料館などで、「標本化」^①された。標本は、モノを散在したまま扱うのではなく、系統に分類する。「分類」は世界を把握するための重要な思考のプロセスとして、博物学は近代まで優位な学問であった。「分類」の中で多様性はある程度^①担保されるが、雑多なモノから共通する要素が導き出されることよって「アイヌの上着の特徴は……である」というようにエッセンスが抽出される。共通項を抽出することが目的なので、共通性を持たないものは個性的で例外的なものとして粹組みから排除されていく。

つまり、現地調査の中で収集され、整理された生活用品群は「本物」としての価値を保ちつつ、標準化されることにより「客観的」にまなざされる。この時、展示者の意図だけでなく、作り手の個性も排除するため、客観化―他者化されやすい。

例えば、北海道大学附属図書館北方資料室に展示されている様々な資料は、人類学・博物学的関心に基づいてアイヌ文化を調査し、収集され、分類され、命名されたものである。モノは生活の文脈から切り離されて、標本として展示されている。また、あほしり網走の北海道立北方民族博物館では、アイヌ、イヌイット、コリヤークなど北方圏で暮らしてきた人々の資料が比較分類され、展示されている。さらに、二〇一五年にリニューアルされた札幌さっぽろの北海道博物館でも、アイヌ文化資料が集積されている。これらの博物館はかつてアイヌの人々が作り出した生活文化を「資料」「標本」として公開するという教育普及の機能を担っている。

いずれの場合も、収集品はアイヌの人々の日常生活から集められたものである。アイヌの人々は、確実にこれらの生産者であり、また使用者・消費者であった。モノは暮らしの必要と秩序にしたがって作られ、家族や地域の中で使用されている段階で集められることはない。モノの^②意匠は、家族や地域によって違うこともあり、例えば現存するイクパスイ（儀礼具）や衣服のデザインの豊かさは、その意匠の多様性や工夫が認められていたことを感じ

させるものである。ただし、アイヌの意匠は完全に各個人の意志に託されていたわけではなく、多様性の中にある種の共通性や統一性を持ちつつ形成されていたと考えられる。

アイヌ文化は生活の中から収集された。一つにはアイヌの人々が自分たちの文化を残し、奪われていることへの抵抗のために、もう一つには、アイヌではない人々が人類学的関心や知の体系化のために、アイヌの生活の中から見出してきたものであると言えよう。

再現されたアイヌ文化

しかし、一度消えかかった文化である以上、アイヌの生活用品が無数に収集できるわけではない。それが限られたモノになってしまったからこそ収集されてきたわけで、新しくアイヌ文化の教育展示施設が設立される際に、生活の物語を再現するために必要なモノを揃えることは難しい。そこで足りない「実物」を複製品（レプリカ）によって補い再現することになる。

札幌市アイヌ文化交流センター（サツポロピリカコタン）は、アイヌ民族の生活や歴史、文化を学ぶ施設であり、多くの人に利用されてきた。アイヌ文化を学ぶワークショップや情報提示、展示室には衣服や民具など約三〇〇点が展示され、来館者はそれらを実際に手に取って見るができる。そうしたことが可能なのは復元制作された複製品が展示の中心だからである。

また、白老しらおいのアイヌ民族博物館（ポロトコタン）は、一九八四年に開館した野外博物館を含む施設群であった（二〇一八年三月閉館。本施設群の跡地には二〇二〇年七月、ウポポイ（民族共生象徴空間）が開設されている）。敷地内ではヒグマや北海道犬が飼育され、伝承保存事業としてアイヌの人々の生活技術を材料収集から加工・制作まで実演されていた。屋外展示空間には五棟のチセが建てられ、チセの中では伝統芸能や手工芸の^③無形文化が公開されていた。博物館では、アイヌ民族の文化が、再現や博物資料、複製品等によって構成さ

れ、アイヌ文化の調査研究の拠点の一つでもあった。この施設の特徴は、アイヌの人々の文化を「再現」していくことにあり、収集品を展示するだけでなく、生活技術の実践と伝習によりモノが使用・消費されてきた文脈の取り戻しが目指されていた。

前述した機動職業訓練により手仕事の技術が復活し、新しい作り手たちによって「復元」が可能になった。その人たちは博物館に收藏される衣服の中の典型的な復元品を制作してきた。例えば、児玉コレクションのルウンペ（木綿衣）^{もめんい}は、カリフの会・津田命子編著『北の手仕事展示会「誌上篇」』（クルーズ、二〇一二年）において加藤シヅエによって復元されている。実際に他の施設に收藏・展示されることもあり、復元事業は精力的に展開されている。「復元」による再現品は、モノづくりの技術や技法を明らかにするだけでなく、文化を再現しようとする際に必要な物語を補完する役割も果たし、かつてあったはずの世界の再構成を意図しているのだ。

生活用品はその収集の段階で、ある程度選別されている。現在のアイヌ文化資料も、使用痕がまったくないものがしばしば見られるが、それらは収集のために制作された可能性もある。そしてその選別済みの限られた生活用品の中から、一定の条件を満たしたものが「復元」されることになる。より特徴的で典型的だと思われるモノや、高度な技術のモノ、美しいモノなどはその対象とされてきた。つまり、特定の「本物」は複数の複製品を生む。「復元」は、本来あったはずのモノの多様性を減らし、選ばれたモノを量的に増加させるが、それによって⑩イメージは固定化していく。実際に、複数の施設で同じ作品を見ることもあり、私たちは典型的な「アイヌ文様」を学習しがちである。

このように文化の再現は、手仕事の技術継承や文化を理解するために極めて重要でありながら、収集によって限定された少数のイメージを反復し量産する。ゆえに、アイヌ文化のイメージを固定化する力が働くと言えるだろう。

典型化するアイヌイメージ

少数のイメージが反復・量産されると、典型となったイメージがアレンジされたり、切り取られたりするようになる。この現象が突出して現れるのが、土産物に代表される商業的な空間であろう。典型的なものは一目でそれと理解できわかりやすいが、その認識を助けるためにイメージの種類は限定される。限られたイメージを量産することで、より消費しやすく、象徴的なものになり、衣服や道具から文様だけが切り取られても、アイヌのものだと理解できようになる。このようにある種の「型」を創り出し典型化することは、商業的な空間では逸脱や例外をなくし、消費者に価値を保証するだけでなく、「アイヌらしさ」という固有性を担保することにもなる。

こうした商品の生産・販売は、アイヌの人々の経済的自立と深く関わっている。観光は北海道という土地において重要な産業であり、アイヌ文化はその観光資源の一つと認識されてきた。世界各地の少数民族も似たような状況に置かれ、近代以降の社会では各地の少数民族の舞踊や衣装、手工芸品やその意匠などが観光の資源となってきた。例えば中国の貴州省では現在、少数民族に出会うエリアとして彼らの文化そのものが観光の目的となっている。

日本でも、すでに大正から昭和初期には、一部の階層が北海道観光をした。本州から船の長旅で訪れた人々は、アイヌコタン（※1）で素朴な土産物みやげものを購入した。例えばアツツシ（※2）の素朴な織りに粗い刺繍ししゅうを施したコースターは、アイヌの人々が日常的に使用するものではなく、アイヌ文様の一部を典型化して販売されたものである。

さらに昭和四〇年代の北海道観光ブームの時には、道外から訪れる観光客が旅の思い出として様々な土産物を買求めた。それらはかつて収集されたような生活用品ではなく、土地のイメージが刻まれた安価な量産品で、土産物として生産されたものがほとんどである。この時期に木彫り熊は大量に彫られ、アイヌの男女を象かたどった対のニポポ人形やアイヌ女性の

形をした布製のアイヌ人形等が大量に出回った。

現在、阿寒湖アイヌコタンでは、アイヌ古式舞踊やイオマンテ（※3）の火まつりのシアター上演、アイヌの生活文化を学ぶ記念館を見ることができ、土産物店や飲食店も多数見られる。駅や空港、ホテルなどの土産物店にもアイヌ文様が印刷された商品が並ぶ。

「あかん湖鶴雅ウイングス」のように、道内各地の宿泊施設でも手工芸品や彫刻、アイヌ文様や刺繍などのアイヌ文化を取り入れている。それは観光客に対して、北海道という土地のモチーフや物語を凝縮して見せるものとなっている。施設の随所すいしょにアイヌ文様が用いられ、アイヌの人々の物語が配置され、施設全体がアイヌイメージの消費空間となっているのだ。同様に、二風谷の宿泊施設「びらとり温泉ゆから」ではアイヌ刺繍による布絵額が館内に設置され、弟子屈町の屈斜路古丹くつしやろこたんのペンション「丸木舟」では花莫菴はなもくざうを模したブラインドなど、ふんだんにアイヌ文化の意匠が取り入れられている。これらは現在広く普及した商業空間の例である。

また「ミナアンイコル」のようなデザインブランドも立ち上げられ、地域デザインのセレクトショップには土地に由来する商品が集められている。ファッション企業のビームスは、アイヌの新しい作り手の商品を紹介するプロジェクトも立ち上げている。

このような消費を助けるのは典型化だけではない。「異質」な文化を消費するためには受容者の生活の変化が求められる。昭和四〇年代には、戦後の家庭に不可欠だった飾り棚やサイドボードに「異質」な土産物が並べられたが、それは土産物という外部の文化を受け入れていく一つの装置だったとも言える。また、「ご当地キティ」のように日本各地の土地の意匠をまとった親しみやすい形を借りることで、「木彫りのアイヌキティ」はおのずと消費しやすい土産物となる。アイヌ文様を印刷した文具や日用品なども同様である。それらはアイヌの人々が使う伝統的な日用品ではないため、文様のデザインに多様性があつては「それらしさ」を享受できない。それゆえ典型的である必要がある。

こうした試みはアイヌ文化に限ったことではない。地域で受け継がれてきた伝統的な手仕事は商業的な空間で、その土地の典型的なイメージとして使用されている。青森の南部裂織なしかまきり保存会が継承してきた朱赤の裂織のイメージは、地元ホテルのモダンなロビーに並べられている。竹富島に伝わるミンサー織は独特の四つ菱ひしと五つ菱が繰り返される文様を持つが、島内だけでなく石垣島でもこのデザインが広く用いられている。これらに共通するのは、典型化された意匠を本来あった日用品から切り取り、現代のスタイリッシュなデザインの中に取り込んで、誰もが消費しやすくしている点であろう。

このように、魅力的なアイヌ文化の発信や、より消費しやすいモノを作り出すことは、さらなる典型化と物質的な量産化を進める。しかし、もともとあった文脈から切り離され、まったく異なるモノに描き込まれた文様は、時に誤解や誤読、無理解によって違和感を覚えさせる事態も生み出してしまふ。

(山崎明子「アイヌ文化をめぐる表象の現在——「誰」が「何」を作るのか」、

池田忍編『問いかけるアイヌアート』、岩波書店、二〇二〇年)

※1 コタン…アイヌ語で「集落」。

※2 アツツシ…アイヌの織物。

※3 イオマンテ…クマなどの動物の魂を神々の世界へ送り帰すアイヌの祭祀さいし。

【設問】

問(1) 傍線部①～③の言葉の意味を説明しなさい。(各3点)

問(2) 破線部④「標本化」とはどのようなことか、一〇〇字以内で説明しなさい。(6点)

問(3) 破線部⑤「イメージは固定化していく」とはどのようなことか、二〇〇字以内で説明しなさい。(10点)

問(4) 「典型化」について、筆者の考えをまとめた上で、文化・芸術における具体例を挙げながらあなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。(25点)

下書用紙 ②